

石田梅岩の真髓と現代に伝承される石門心学

清水 正博

The essence of Ishida Baigan philosophy and Sekimon-shingaku which influences us living today

Masahiro SHIMIZU

- I はじめに～長寿企業要因と石田梅岩～
 - II 石田梅岩の教えの真髓
 - 1. 農業・商業の体験を通じて人たる道を修める
 - 2. 講舎を開き民衆教化～『都鄙問答』の刊行～
 - 3. 商人蔑視の時代背景の中、永続的に栄える商人の道を唱える梅岩
 - 4. 士農工商ともに天の一物
 - 5. 梅岩の至高の恩師～了雲といつ出会いどんな指導を受けたか～
 - III 心学舎の興隆と現状
 - 1. 心学を広めた弟子達
 - 2. 心学講舎のデータベースの作成と活用
 - 3. 心学講舎は幾つあったか
 - IV 心学風土記
 - 1. 誠終舎（蝦夷）：函館に西川晩翠の指導のもと心学が開花
 - 2. 尽心舎（常陸）：平成まで集いを続ける
 - 3. 有隣舎（常陸）：子孫は二十代目中村兵左衛門氏
 - 4. 有敬舎（信濃）：平成の世に心学「有敬舎」の建碑
 - 5. 明誠舎（摂津）：大丸は義商なり、今日まで心学舎の中核を担う
 - V 経済人への影響
 - 1. 松下幸之助と石田梅岩の共通点
 - 2. 稲盛和夫と石田梅岩
 - 3. 企業経営に生きる心学の教え～半兵衛麩・商業界・叶匠寿庵～
 - VI おわりに
- 参考文献

キーワード 石田梅岩・石門心学・CSR・イノベーション・永続的に栄える・性（本心）を知る・商人の道・先も立ち我も立つ・商人の利・儉約・正直・聖人の道・士農工商共に天の一物・了雲・修行・教育・心学舎・諸国舎号・心学風土記

I はじめに～長寿企業要因と石田梅岩～

2018年10月26日、日本経済新聞朝刊の文化欄に「心学が説く商人の道～商家の経営に影響を与えた石田梅岩の教えを紡ぐ」（著者：堀井良殷心学明誠舎⁽¹⁾理事長）が掲載された。「企業不祥事が今なお後を絶たず、グローバリズムの欠点も露呈している。全ての価値観が金銭だけに収束する社会とならないように、心学を世界に広めて次世代に引き継ぎたい」と結んでいる。

三世紀にわたり現役として生き続けて来た石門心学は、まだまだ経済界にお役立ちする用意がある。

本年は享保14年（1729）に石田梅岩が京都・上京^{かみぎょう}の一隅に私塾を開講して290年にあたる。一世代を約30年とすると、10世代を経ていることになる。今なお、石門心学の教えを受け継ぐ舎の活動が各地で定期的に行われているほか、心学関係の書籍が発刊されている。石門心学を一経営体と見ると、立派な老舗組織である。

私は以前に日本に長寿企業の多い理由を、次の通り述べた⁽²⁾。

1. 社会に有用な存在であること。
2. 革新（イノベーション）を継続していること。
3. 上記に投資できる業績の維持と、危機を乗り越えるための人的資源を有していること。

1はこの度のような大災害（注：東日本大震災）のときに、真に社会にお役立ちできる企業・人であるかどうかを試されている。2はドラッカーの語る「企業の使命は顧客の創造」であり、そのための二大機能がマーケティングとイノベーションであるという名言からも、革新は企業の存続条件であることは明白である。3は一口に言うと健全な経営体ということだ。

上記の3点があつてこそ、企業は持続可能なのである。

長寿要件は企業のみならず、全ての組織に当てはまる。先の3理由が、石田梅岩の功績と結びつくことは、残された著作等⁽³⁾からも説明できる。

1は企業（組織）の社会的責任を果たすことであり、今日のCSR（Corporate Social Responsibility）と同義である。まさに石田梅岩が言い続けたことで、石門心学の支柱である。「商人の道を知らざる者は貪ることをつとめて家を亡ぼす」（後述）との言葉通りである。私達は企業の衰退の多くが、故意・過失による法令や社会規範に違反していることを見聞している。

2については、梅岩は師・小栗了雲より「温故知新」の意味を、「故きとは師から聞くとこ^ろ。新しきとは自ら発明するところなり」と教えられ、以後、金科玉条としていた。この「知新」こそがまさにイノベーションである。

3は財務と人事の重要性である。梅岩は教育者であり人材育成が本業である。また財務は経営の根幹である。再投資するための業績維持は梅岩の体験からにじみ出た祈りでもある。

石田梅岩が起業し弟子達が継承した石門心学の流れと、現代における価値について考察する。

II 石田梅岩の教えの真髓

1. 農業・商業の体験を通じて人たる道を修める

梅岩は貞享2年(1685)、丹波(現亀岡市)の中農の家に生まれた。南北に山が迫り、生家の面前に八幡神社、そのすぐ東に先祖が開基した曹洞宗・春現寺がある。梅岩は幼少の頃から、神官や禅僧より思想形成上で大きな影響を受けたであろうことが地形より知られる。

11歳で京都の商家に奉公に出るが、勤め先の経営状態が悪化し4年ほどで帰郷し、農業に従事。この最初の奉公時分は元禄期(1688~1704)に当たり、京都中心部は活況を呈し、好景気下における商家の繁盛ぶり、人々の金銭の消費ぶりも目にしたことであろう。

23歳で再び上京し呉服商・黒柳家に勤める。このとき既に、「神道を説き広むべし、若し聞く人なくば、鈴を振り町々を廻りてなりとも、人に人たる道を勧めたし」⁽⁴⁾との高い志を有していた。そのため早朝、深夜、昼間の奉公の合間にも書を読んだ。同輩からその志を問われ「学問し古の聖賢の行いを見聞きし、あまねく人の手本になるべし」⁽⁵⁾と答えている。当時から教育者たるべく道を歩んでいた。

奉公先の主人からの庇護も受けるが、それに甘んじることなく日々の仕事に精進し、商家経営の要諦を学ぶ。この時代の体験が後に指導者となるに際し実学として生きたのである。

梅岩35、6歳の頃に「自性」を知ったと思っていたがその性に疑いが起こり、師を求めたが叶わなかった。梅岩哲学の中心「性を知る」は儒教からきているが、禅宗の影響も受けている。

梅岩は「自性」を知ろうと日夜悩みぬき、勤めのかたわら京都中を巡るも望みは果たせず、ようやく隠棲の学者・小栗了雲(1668年~1729年)を探し当て師弟の交わりを結ぶ。そしてあたかも白隠と正受老人を思わせる、峻烈な指導が了雲の遷化まで続く。この詳細は後に触れる。

了雲は儒学にも通じた黄檗宗の僧と伝えられ、永年求めていた師に邂逅し梅岩は遂に大悟の域に達し得たのであった。この時の心境を称して、「二十年來の疑いを解く。これ、文字のする所にあらず。修行のする所なり」⁽⁶⁾と語っている。

なお小栗了雲⁽⁷⁾は、越後騒動で將軍・綱吉より切腹を命ぜられた小栗美作の親族であり、京都で世を憚った生活を送っていた。かつて黄檗派の禅学を修めたとのことである⁽⁸⁾。

2. 講舎を開き民衆教化～『都鄙問答』の刊行～

享保14年(1729)車屋町御池上ルの自宅で学舎を開く。講席に際し表に常に掲げた書付は「御望の方々は遠慮なくお通りお聞き成さるべく候。お女中方は奥へお通りなさるべく候」⁽⁹⁾。

常に使用した書は「四書・孝経・小学・易経・詩経・大極図説・近思録・性理字義・老子・莊子・和論語・徒然草等」。和論語・徒然草を除いては、中国の古典であり、儒教の文献を中心に据えていた。

この時代、女性に経書を講義するような先進的な私塾は希有であった。男子席と女子席の間には簾で分けて学ぶ環境を整えた。このような梅岩の訓導方針の中から、慈音尼という女性指導者が生まれ、梅岩逝去後、勇躍、江戸へ出て、師の教えを伝える学び舎を開き、近畿以遠での心学普及の先がけを為した。

なお、ある学者が梅岩の掲げた書付を見て、「儒書が女の耳に入るものか、めずらしき書付けなりかな」と誹ったと告げる人があった。それを聞いて梅岩は「古^{いにしへ}の紫式部、清少納言、赤染衛門などを、その学者は男と思われ候や」との逸話⁽¹⁰⁾が残っている。

最初は聴衆も少なかったが、徐々に評判が高まり、毎日の自宅での講席に加え、京都のみならず、大阪、摂津・河内などへの出講釈が増えていった。

著書の刊行にあたっては門人5名と城崎温泉に籠もって、これまでの講義録の編集を行い、元文4年(1739年)に『都鄙問答』の出版に至った。全4巻16段のうち、中心の教えとなる「自性を知る」に関するところは「性理問答の段」で次のように説く。「仏性というは天地人の体なり。至極の所は性を知る外に仏法あらんや。仏より28世、達磨大師は見性成仏と説けり。また儒には道の大原は天に出ず。依って天の命これを性という、性^{したが}に率うは人の道なりと説きたまう。性というも天地人の体なり。神儒仏ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも、皆我が心を得るなり」。梅岩は自分の心に一致している法を用いている。自身の思想が先にある後に、各種古典より共通する言葉を引用しているのであると述べている。断章取義とする後の批判者へ、予め先手を打っているのであろう。

3. 商人蔑視の時代背景の中、永続的に栄える商人の道を唱える梅岩

ここで当時の時代背景について触れたい。將軍綱吉・吉宗の時代に政治顧問的役割を担っていた荻生徂徠(1666～1728年)は著書『政談』の中で次の通り述べている⁽¹¹⁾。

「すべて商人というものは、高利をむさぼって世渡りをするものであるから、現在でも一夜で分限者になったり、また一日の間につぶれたりもするが、これももともと生活の根拠が不安定だからである。(中略)商人がつぶれることは、まったく気にかける必要はない。これもまた政治の道の基本的な心得であることを知っておくべきである。」

この政談は享保12年(1727)に吉宗に上呈されている。徂徠は元禄から享保にかけて時の中枢権力の側近として政策決定まで関与しており、彼の言動の影響ははなはだ強大であった。徂

徠の商人蔑視の姿勢が幕府の経済政策に繋がったといえよう。

宝永2年(1705)、淀屋の闕所処分¹¹の記憶は当時残っていたであろう。経済活動を規制する為政者の姿勢に、商人は心理的圧迫感を受けていた。

このような社会環境の中で梅岩は、「勤勉」「儉約」の手本を自ら示すとともに、講話や著書でも繰り返し強調している。まさに「商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば、一錢軽しと云うべきに非ず。これを重ねて富をなすは商人の道なり」。更に「商人というも聖人の道を知らずば、同じ金銀をもうけながら不義の金銀をもうけ、子孫の絶ゆる理に至るべし。実^{まこと}に子孫を愛せば、道を学んで榮えることを致すべし」と述べ、利潤を得る際にも聖人の道という崇高な精神的尺度を当てはめている。

梅岩は商人が利潤を得ることの意義を説く一方で、「実^{まこと}の商人は、先も立ち我も立つ」として、相手が先に立つこと、まず先方に利益が得られるようにすることの大事さを教えた。近江商人の三方よしに先立つ「先我両立」の教えであった。そして得た利潤である「富の主」は天下の人々のものであるとした。ここでは、商家の利益の上げ方と経費の使用に関する根本命題を示唆している。

名利の欲を抑え、正直を守ることが商人の最も重要な徳目であるとしている。彼のもう一つの著作『齊家論』でその事例を挙げている。

洪水で取引先が全財産を失くし売上金の回収ができなくなった。一方で仕入先へは仕払いがありこれを払うと丸裸になってしまう。そう相談された梅岩は、全て売って借金を払えと言う。人間生まれたときは皆裸であったが、周りの者が産着を着せてくれる。商人も同様で、こちらに慈悲・正直の心があれば、借りた側も返済の努力を怠らないものである。「正直」な行いをして、心に恥じることがなければ、必ずや繁栄するであろうと。

4. 士農工商ともに天の一物

この時代の身分制度を梅岩は社会的分業であると説く。「士農工商は天下の治まるたすけとなる。四民かけては助けなかるべし。四民を治めたまうは君の職なり。君をたすくるは四民の職なり。士^{さむらい}は元より位ある臣なり。農民は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君をたすくるは臣の道なり。商人の売買するは天下のたすけなり。細工人に作料を給わるは工の禄なり。農人に作間^{あい}を下さることは是も士の禄に同じ。天下万民産業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免^{おんゆるし}の禄なり。それを汝ひとり売買の利ばかりを欲心にて道なしと云い、商人を憎んで断絶せんとす。何をもって商人ばかりを賤しめ嫌うことぞや」⁽¹²⁾と、激しい語調で持論を展開する。さらに言葉を継いで商人を擁護する。「商人の利を受けずしては家業勉まらず。吾が禄は売買の利なるゆへに買人あれば受けるあり。よぶに従って往くは、役目に応じて往くが如し。欲心にあらず。士の道も君より禄を受けずしては勉まらず。君より禄を受けるを欲心と云って、道にあらずと云わば、孔子孟子を始めとして、天下に道を知る人あるべ

からず。然るを士農工にはずれて、商人の禄を受けるを欲心と云い、道を知るに及ばざる者と云うは如何なることぞや。我教ゆる所は商人に商人の道あることを教えるなり。全く士農工のことを教ゆるにあらず。(中略)心は士にも劣るまじと思ふべし。商人の道と云えども何ぞ士農工の道に替わること有らんや。孟子も道は一なりとのたまう。士農工商ともに天の一物なり、天に二つの道あらんや」。

商人道は武士の心に比して劣ることがないと、処罰を覚悟で言い切っている。梅岩の職分による平等思想が躍如するところである。この決死の主張が四民にも受け入れられ、『都鄙問答』は版を重ねる。今も私達はこの名著を、岩波文庫を始めとした各種媒体⁽¹³⁾で手軽に読むことができる。

梅岩の教えが変わらず今日まで伝わっているのは、農・商の出身でありながら、四民の社会的存在意義への高邁な理想宣言、貧富・男女の枠を設けず受け入れる経書の学びの場の提供など、庶民への限りない愛惜の心情が、多くの人々に共感を持たれたからに相違ない。来たるべき産業革命に先立ち、商業倫理に関する地ならしを行った功績は大なるものがある。

5. 梅岩の至高の恩師～了雲とはいつ出会いどんな指導を受けたか～

『石田先生事蹟』では、梅岩の生涯を詳かに説明している。中でも了雲とのやりとりは、全362行中、31行(8.8%)に及ぶ。この事実からも梅岩の終生において、最も大きな影響を与えたのが了雲であると言えよう。師との交流の場面を以下に引用する⁽¹⁴⁾。

先生35・6歳の頃まで、性を知れりと定めるたまひしに、何となく其性に疑ひおこり、是を正さんとて、かなたこなたと師を求めたまへども、何方にても師とすべき人なしとて、年月を歴給ひしに、了雲老師にまみえ給ひ、性の論に及び、先生みづからの見識をいはんとしたまふに、卵をもつて大石にあたるがごとく、言句を出し給ふことあたはず。爰において悦び服し、師として事へ給へり。

其後は日夜他事なく、いかんいかんと心を盡し、工夫し給ふ事、1年半も過ぎける頃、母病ひに臥し給ふ故、故郷へ行きたまへり。其時先生四十歳ばかりなり。正月上旬の事なりけるが、母の看病し居たまひしに、用事ありて、扉を出てたまふとき、忽然として、年来のうたがひ散じ、堯舜の道は孝弟のみ、鵜は水を泳ぐり、鳥は空を飛ぶ。道は上下に察なり。性は是、天地萬物の親と知り、大いに喜びをなし給へり。

其後、都にのぼり、師にまみえ給ひ、禮終りて、師「工夫熟せるや」と問ひたまふ。先生對ふるに「如是如是」といひて、きせるにて空を打ちたまひければ、師曰、「汝が見たる所は、有べかゝりのしれたる事なり、盲人象を見たる譬へのごとく、あるひは尾を見、あるひは足を見るといへども、全體を見ることあたはず。汝我性は天地萬物の親と見たる所の目が残りあり。性は目なしにてこそあれ。其目を今一度はなれきたれ」とありければ、先生それより又日夜寝食を忘れ、工夫したまふ事、一年餘を経て、ある夜深更におよび、身つかれ臥したまひ、

夜の明けしをもしらず、臥し給ひしに、後の森にて、雀のなく聲きこえける。其時腹中は大海の静々たるごとくまた青天の如し。其雀の啼ける聲は、大海の静々たるに、鶉が水を分けて入るがごとくに覺えて、それより自性見識のを見を離れ給ひしとなり。(以下略)

梅岩が了雲と出会った年、及び師事年数について定説はない。両者の出会いが30代か40代かに二分される。【表1】は30代説、【表2】は40代説の主な文献を記載した。尚、柴田實(実)には30代説と40代説があるので両表に記載する。そして両者の代表的見解を元に、【表3】【表4】にそれぞれの年表を作成する。

【表1】 30代説文献

著者	書籍名	内 容
石川謙	『石門心学史の研究』(岩波書店、1938年) 203頁	「40歳にも近い頃であったであろう、彼が最後に師事した、恐らく最初に師事したのもあった、小栗了雲から修学の目的を問われた際にも(以下略)」
同上	『石田梅岩』(文教書院、1943年) 21~22頁	40歳(享保9年)の時、母の看病に力を尽した折に悟境に行き着くも、了雲から不十分さを宣告される(筆者要約)。「享保11年、彼42歳の頃になって初めて『性』を完全に把握することができたのであった」。
柴田實	『梅岩とその門流』(ミネルヴァ書房、1977年) 80頁	「35、6才のころ、たまたまた了雲に邂逅して、まずみずからの見解を述べようとしたところ」
白石正邦・田邊肥洲	『石田梅巖』(藻岩書店、1941年) 10頁	「梅巖が了雲に始めて相見えたのは38歳の頃とせらるる」
古田紹欽・今井淳	『石田梅岩の思想』(ペリカン社、1979年)、258~259頁、年譜	「享保4年(1719年)35歳。この頃から人性について不安を覚え諸家を聞き巡り、数年の後、小栗了雲と出会い、師事す」「享保9年(1724年)40歳 正月上旬、母の看病のため故郷へ帰る。(中略) 帰郷後この旨を了雲に報告する」

【表2】 40代説文献

著者	書籍名	内 容
岩内誠一	『教育者としての石田梅岩』(岩波書店、1934年) 年譜15頁、本文54~55頁	「43歳、享保12年 小栗正順(了雲)に就いて学ぶ」「ある日梅岩、了雲に出遭い(中略)性の如何につきて沈思考究すること1年半餘に及んだ。然るに母が病気に罹って床に就いたので、主家より暇を貰って郷里に帰り(中略)40歳許りであった」。再度工夫して1年余り。「梅岩の大悟した時は、師了雲の物故後であった」。
木南卓一	『石田梅岩私新抄』(1985年)「石田梅岩研究」4頁	「梅岩の奉公生活は42・3歳まで続いた。商家を辞して後は所処の講義をも聞いたが、この前後に隠棲していた学者小栗了雲にめぐり逢い」
柴田実	『石田梅岩』(吉川弘文館、1962年) 153頁、略年譜	「享保12年、1727年、43歳、小栗了雲について学ぶ」

竹中靖一	『石門心学の経済思想』 (ミネルヴァ書房、1962 年) 411頁	「享保11、2年(1726～7年)42、3才で、主家を辞し、 本腰を入れて、『性理』の問題に没頭。享保12年、ようやく にして小栗了雲にめぐりあうことができた。」
------	---	---

【表3】梅岩と了雲の邂逅年表(30代説)

年号	年齢	出来事
享保4 1719	35	自性を知ったと思ったが、疑問が起き、これを確認しようと師を求める
享保7 1722	38	了雲に巡り合う。性について論議するも、卵が大石にあたるがごとく、言葉を 発することができず、師として仕える。
享保9 1724	40	1年半が経った頃、母、病に臥す。 正月、故郷へ帰り、母を介護する。その折り、年来の疑いが晴れ、性は天地萬 物の親と知り、大いに喜ぶ。 帰京して了雲にその旨を告げると、自性は天地萬物の親と見た目が残ってい る。その目を離れてきなさいと、指摘される。
享保11	42	その後、1年余り、寝食を忘れ工夫し、遂に自性見識の見を離れる。
この間		<ul style="list-style-type: none"> ・梅岩は42・3歳で黒柳家を退職し、諸家の講義を聞く。 ・梅岩は半年程、了雲の所へ立ち寄らなかった。ある兄弟子が「梅岩は優れて いるが、師が余りにも厳しいので離れてしまった。大変残念なことだと」 と語ったところ、了雲は「梅岩のことは構わず」と平然としていた。 ・了雲は梅岩に「近いうちに、宿を持ったらどうか。ただ学問ばかりに歳月を 送るのは考え物だ」と言ったところ、梅岩は「私は長者になります」と返答し た。この発言に了雲は悦ぶ。 ・了雲は言った。「私は本を書かない。汝は書く。本を書くことを欲するの でなく人を作れ。講釈するのに、話しを聞かせるのではなく、我に得たところ を述べるのみだ。徳を明らかにせよ」。(『補遺』368)⁽¹⁵⁾
享保14 1729	45	<ul style="list-style-type: none"> ・了雲の病が重くなり、梅岩が看病をしていたところ、煙草を所望。梅岩が煙 草に火を点け、キセルの吸口を半紙にて拭いて渡そうとしたところ、了雲は 「私の看病をさぞむさくるしい事とと思っているのであろう」と怒り、夜半2時 前、退出を命じる。梅岩は退き涙を流した。兄弟子がとりなし、ようやく許さ れた。10月17日～18日未明。 ・了雲はかねてより梅岩に「仁義をテコに使うな」と述べてきた。半紙にてキ セルの吸い口を拭うのは正にそのことだと指摘。 「汝が使い良き故に門弟にまで仁義をテコに使うことを教えるのではないか」 と師に言われぬように心したいと梅岩は誓う(『語録』106)⁽¹⁶⁾ ・翌18日は機嫌が直る。 ・臨終間際に、了雲は梅岩に「注を入れた書を与えたい」と伝えたと ころ、梅岩は「ほしくない」と答えた。了雲が「どうしていらぬのか」と尋ねると、 梅岩は「私は自分が人の師となるときは、私の言葉で語ります」と言った。了 雲はこれを大いに褒め称えた。 10月19日朝、了雲逝去。その後、年内に梅岩開講。

【表4】梅岩と了雲の邂逅年表（40代説）

年号	年齢	出来事
享保4 1719	35	自性を知ったと思ったが、疑問が起き、これを確認しようと師を求める。
この間		黒柳家に勤めながら、独学で諸家を巡り教えを聞く。
享保12 1727	43	<ul style="list-style-type: none"> ・梅岩は42・3歳で黒柳家を退職し、諸家の講義を聞く。 ・了雲に巡り合う。性について論議するも、卵が大石にあたるがごとく、言葉を発することができず、師として仕える。
享保14 1729	45	<ul style="list-style-type: none"> ・1年半が経った頃、母、病に臥す。 ・正月、故郷へ帰り、母を介護する。その折り、年来の疑いが晴れ、性は天地萬物の親と知り、大いに喜ぶ。 ・帰京して了雲にその旨を告げると、自性は天地萬物の親と見た目が残っている。その目を離れてきなさいと、指摘される。 ・了雲の今際の際の「キセル事件」「注釈書を与える」などは、30代説参照。詳細は略す。 ・了雲逝去、10月19日。その後、梅岩開講。
享保15 1730	46	母介護の折りの体験から、1年余り、寢食を忘れ工夫し、遂に自性見識の目を離れる。

◆両説の比較・検討

〔30代説〕根拠は『石田先生事蹟』に「(了雲と出会い) 1年半も過ぎける頃、母、病に臥し給う故、故郷へ行きたまえり。其時、先生、40歳ばかりなり。正月上旬の事なり」。つまり、40歳の正月に母が病いのために帰郷し、その1年半前の38歳の時に了雲と出会った。

〔40代説〕30代説と同様、根拠については当方での推測であるが『石田先生語録』(131)⁽¹⁷⁾に「かたじけなきことは尊師に逢い奉り、真の道を聞きかかり出入り3年日程も成り、病氣付きたまい、末期に至りて漸く薄々本心是の如くかと知り、尊師死後に至りて弥々決定せり。ここに於いて聖意をうすうす知り得たり」とある。「出入り3年日程」で了雲が末期に至ったことから、43歳で出会い45歳で見送った。その後に「本心」を知った。

この2説により梅岩の心情への影響はどう異なるか、【表3】【表4】を基に述べる。

30代説では両者の相まみえた期間は梅岩38歳から45歳までの7年半になる。この期間、肝胆相照らすことになれば、もはや家族も同然で、梅岩は了雲を師であると共に、父の如く慕っていたであろう。最後の看取りも行えて、心的満足は甚だ大きかったものと思われる。開悟後、独立までに十分な準備期間があり、師を見送った区切りの決意を持って、講席を開いたものと思われる。順風満帆の船出と言えよう。

一方、40代説。43歳からの出会いでは約2年半の交流である。濃縮した期間での厳格な訓導に梅岩は日々自戒の連続であっただろう。この間、半年も訪問しない時もあり、また母介護での帰郷もあった。自性を知るに至らず、まだまだこれからという時に師が病に臥し、今際の際

のキセル事件もあり、名残り惜しい別れであっただろう。そんな直後の開講は見切り発車と言わざるを得ない。

30代説の7年半の修行期間は長く間伸びの感がする。また40代説では母介護の時の「40歳ばかりなり」が45歳となってしまう余りにも離れ過ぎである。両説共に疑義がある。

この項の最後に出典の正確性を考察し、両者の出会いの年代について私見を述べたい。信憑性の高い順に出典を列挙する。()内はその根拠。①『都鄙問答』『齊家論』(梅岩自身の執筆)、②『石田先生語録』(梅岩の書付の転写)、③『石田先生事蹟』(門弟達が起草し出版)。最も信頼性の高い『都鄙問答』には「40余りの比ひより此の道に志す」という表記があるがどう解釈すべきか。②③に記載の年数については、転記ミスや記憶間違いの可能性も考慮に入れ、記載年数について幅を持たせて考えるべきであろう。

私は両者の出会いを41～42歳、母介護の年を43～44歳と考えるのが、両者が相まみえた期間としては収まりがよいように思う。なお大悟の時期は40歳代説の通り、了雲逝去後とする。但し、10月19日逝去、その後に「本心を決定し」得て、年内に梅岩の開講に至ったと判断するところである。

上記の三説それぞれにおいて、梅岩の心の有り様は変わってこよう。梅岩による門弟への教導に、学んだ期間と内容の影響がどのように現れたかについては、今後の課題としたい。

Ⅲ 心学舎の興隆と現状

1. 心学を広めた弟子達

江戸中期以降、石門心学が日本の徳育、社会の安寧、経済の繁栄に与えた影響を俯瞰するにつけ、始祖・石田梅岩をはじめ、その弟子・社中達の刻苦の跡を仰ぎ見る思いがする。

直接梅岩師の薫陶を受けた「梅岩十大弟子」、師とは出会っていないが石門心学の広布普及に功績をあげた「心学後継者十哲」を記載する。これらは筆者の個人的選定による。

梅岩十大弟子(生年順):小森由正、黒杉政胤、斉藤全門、木村重光、杉浦止斎、慈恩尼、富岡以直、手島堵庵、大江資衡、杉浦宗仲。

心学後継者十哲(生年順):布施松翁、中澤道二、上河淇水、脇坂義堂(生年不明)、鎌田柳弘、大島有隣、薩埵徳軒、柴田鳩翁、奥田頼杖、中村徳水。

2. 心学講舎のデータベースの作成と活用

私は近年、心学講舎が現在にどう伝えられているか、書面及び現地調査を行い、「全国心学舎一覧表」を作成している。本表は石川謙(1938)(1982)⁽¹⁸⁾及び地方自治体等の協力を負うところが大きい。

【表5】に表頭のみを2段に分けて記す。今後、内容の精度を高め、各種分析に活用したい。

【表5】「全国石門心学講舎一覧表」の表頭

舎名	国	都道府県	市町村	創始	廃絶	指導者	都講(舎主・講師)
誠終舎	北海道	北海道	函館市	安政4	明治初年	西川晩翠(江戸・武士)	松代伊兵衛(町年寄)、益田利右工門、代島剛平
組織	藩	記号	主要人物、史蹟	資料		備考(調査日)	
独自	天領	民	扁額・蔵書	函館デジタル市史、教育史等多数		170907	

【表6】に「全国石門心学講舎一覧」(圧縮版)として以下の①～⑨を記録した。

- ①連続No: 連続して1～182番を振った。
- ②舎号: 『諸国舎号』⁽¹⁹⁾の記載順に番号を付した。
- ③舎名: 舎名の漢字は石川(1938)の索引名を基準とした。
- ④国: 江戸時代の国名。
- ⑤⑥都道府県・市町村: 現在の住所を記した。
- ⑦⑧創始・廃絶: 石川(1982)(1938)をベースとして、独自調査を加えた。
- ⑨備考: 記号は右の通り。◎心学風土記作成、○現地調査済み、遺物(建物=「建」、扁額=「扁」、舎号=「舎」、「碑」、「墓」、書物=「書」)。建物は当時のものでなくても現在舎の表記があれば可とした。舎号は明倫舎印のあるもの。碑は心学関連の文言が入っているもの。墓は、舎主・講師に限り、文献に掲載され、かつ筆者が確認したもの。書物は全国流通の印刷物を除く当時のもの。書画を含む。

備考に記載の現地調査は、何らかの痕跡が残っていることが確認できた65舎中、57舎を訪ねた。痕跡は今後の調査により更に増えていくと考えている。痕跡の種類は次の3段階に分けた。1. 蔵書類・墓碑等、2. 扁額・顕彰碑等、3. 継承者による史蹟の保存。私が確認したそれぞれの数は以下の通り()内は未見。1. 13(7)、2. 21(1)、3. 31(0)。

なお、心学舎以外での心学関係史蹟は17箇所把握している。うち、未見は3箇所。これらの視察内容については「心学風土記」を記し、順次報告を進めている(後述)。

【表6】全国石門心学講舎一覧(圧縮版)

No	舎号	舎名	国	都道府県	市町村	創始	廃絶	備考
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
1	無	誠終舎	蝦夷	北海道	函館市	安政4	明治初年	◎・扁・墓・書
2	162	勸友舎	陸奥1	青森	三戸町	安政6	不明	
3	63	善教舎	陸奥2	福島	いわき市	寛政9	文化9	○
4	156	鶴鳴舎	出羽1	山形	鶴岡市	安政2	明治7～8	◎・碑・書
5	47	誠形舎	下野1	栃木	宇都宮市	寛政5・6頃	文化7～8	
6	61	存養舎	下野2	栃木	那須烏山市	寛政9	文化7～8	
7	77	會友舎	上野1	群馬	高崎市	寛政12、文久8	文化8、明治18	○・碑
8	79	自謙舎	上野2	群馬	高崎市	文政末	天保(武蔵へ移転)	
9	131	三孝舎	上野3	群馬	伊勢崎市	享和元	文政	
10	76	成性舎	上野4	群馬	昭和村	寛政12	文政	

11	169	當行舎	上野5	群馬	館林市	嘉永7	明治	
12	121	孝準舎	常陸1	茨城	土浦市	文政10	天保	
13	67	孝友舎	常陸2	茨城	常陸太田市	寛政10~12	文政	
14	58	三省舎	常陸3	茨城	水戸市	寛政8・9	文政	
15	55	盡心舎	常陸4	茨城	つくば市	寛政7	文久3(平成まで祭祀)	◎・扁・書
16	43	有隣舎	常陸5	茨城	筑西市	寛政5・6頃	天保	◎・書
17	133	敬親舎	下総1	茨城	常総市	天保4	弘化存続	
18	122	一貫舎	武蔵1	埼玉	三郷市	文政10	弘化	
19	22	恭儉舎	武蔵2	埼玉	杉戸町	天明5	昭和まで祭祀	◎・建
20	130	親々舎	武蔵3	埼玉	熊谷市	文政12、13	天保存続	
21	57	先行舎	武蔵4	東京	八王子市	寛政8頃	文政	
22	111	安民舎	武蔵5	東京	新宿区	文化13・14	文政5頃	
23	無	開成舎	武蔵6	東京	江東区	明治2年	明治23	
24	32	圭明舎	武蔵7	東京	港区	天明末年	弘化存続	
25	34	盍簪舎	武蔵8	東京	新宿区	寛政2	明治7~8	
26	9	参前舎	武蔵9	東京	中央区	天明3	平成	◎・墓
27	無	自謙舎	武蔵10	東京	中央区	天保(上野より移転)	明治18	
28	21	慎行舎	武蔵11	東京	中央区	天明3、文政9年復興	弘化存続	
29	151	徳隣舎	武蔵12	東京	新宿区	弘化4年	安政存続	
30	139	興讓舎	相模1	神奈川	伊勢原市	天保10	嘉永3年	
31	141	潤身舎	相模2	神奈川	相模原市	天保末	不明	
32	68	道生舎	相模3	神奈川	〃	寛政10~12	天保3	
33	81	篤行舎	相模4	神奈川	〃	享和3、安政5復活	文政、明治5年	
34	89	永言舎	甲斐1	山梨	上野原市	文化6	文政	○・墓
35	69	簡文舎	甲斐2	山梨	〃	寛政11・12頃	文政8存続	
36	70	洗心舎	甲斐3	山梨	甲府市	寛政11頃	明治初	○・書
37	49	存心舎	甲斐4	山梨	〃	寛政5・6	文政8存続	
38	50	忠款舎	甲斐5	山梨	笛吹市	寛政5・6	文化14	○・碑・墓
39	73	寛柔舎	信濃1	長野	諏訪市	寛政12	天保	
40	28	恭安舎	信濃2	長野	千曲市	天明4・5頃	安政以降	○・墓
41	29	匡直舎	信濃3	長野	長野市	天明7	文政	
42	33	教倫舎	信濃4	長野	須坂市	天明末年	幕末まで繁栄	
43	74	敬業舎	信濃5	長野	佐久市	寛政12頃	文政	○・碑
44	94	好問舎	信濃6	長野	茅野市	文化8	天保	
45	93	時中舎	信濃7	長野	富士見町	文化7	現在も行事	◎・建・書
46	44	成章舎	信濃8	長野	佐久市	寛政5・6頃	文政	○・碑
47	60	博厚舎	信濃9	長野	長野市	寛政7年(舎号より)	文化	○・碑・号
48	137	明孝舎	信濃10	長野	中野市	天保6	安政元(馬場没)	○・扁
49	64	有敬舎	信濃11	長野	松本市	寛政9・10年頃	文政	◎・碑
50	48	友諒舎	信濃12	長野	松本市	寛政5・6	文政	
51	無	仁儉舎	越中1	富山	富山市	文化・文政	文政	
52	116	謙享舎	越前1	福井	鯖江市	文政初	明治	○・扁・書
53	161	反求舎	加賀1	石川	金沢市	安政6	明治初年	◎
54	148	信貞舎	駿河1	静岡	静岡市	弘化4	明治	
55	無	敬讓舎	遠江1	静岡	掛川市	天保7	弘化	
56	134	止敬舎	遠江2	静岡	〃	天保7	明治6	○・碑
57	119	擇仁舎	遠江3	静岡	〃	天保7	弘化	
58	120	順天舎	尾張1	愛知	名古屋市	文政9年、明治12・13	安政存続	◎
59	170	謹身舎	美濃1	岐阜	岐阜市	慶応元年	不明	○
60	無	富円舎	美濃2	岐阜	多治見市	明治元年	明18、資料公開中	◎・書
61	無	執中舎	美濃3	岐阜	関市	文政5、6頃	文久2以降	
62	119	深造舎	美濃4	岐阜	大垣市	天明3、4頃	文政末	◎・書
63	15	切問舎	美濃5	岐阜	山県市	寛政5	天保元	◎・号・書

石田梅岩の真髓と現代に伝承される石門心学

64	52	擇善舎	美濃 6	岐阜	大野町	寛政 5、6 頃	文化、明治(文教史)	
65	51	天祐舎	美濃 7	岐阜	美濃市	文政 2、3 頃	明治 7、8	
66	118	逢原舎	美濃 8	岐阜	岐阜市	文化13・14、天保	文政14末までに	
67	112	萬徳舎	美濃 9	岐阜	岐阜市	明治初	明治20	○・墓
68	117	明道舎	美濃10	岐阜	郡上市	文政 2・3 年、慶応活動	天保	
69	無	会友舎	美濃11	岐阜	土岐市	明治	現在資料公開中	◎・書
70	59	有誠舎	伊賀 1	三重	伊賀市	寛政 5 頃、天保 3	文化中期、幕末	◎
71	39	麗澤舎	伊賀 2	三重	伊賀市	寛政 5	文政	◎・碑
72	56	勸善舎	伊勢 1	三重	津市	寛政 7・8 頃、嘉永 6	文化、慶応 3	
73	103	克己舎	伊勢 2	三重	四日市市	文政 9~10	天保	
74	20	好善舎	近江 1	滋賀	東近江市	天明 4・5 頃、	文化	◎・扁・書
75	165	方來舎	近江 2	滋賀	甲賀市	寛政 5	明治 6	
76	8	汎愛舎	近江 3	滋賀	近江八幡市	文化 7・8 頃	天保	
77	92	温恭舎	近江 4	滋賀	彦根市	天明 4・5、天保13	文化、安政存続	
78	96	忠告舎	近江 5	滋賀	大津市	文化 7・8 頃	文政	
79	45	教養舎	近江 6	滋賀	大津市	安政~万延元	文久存続	
80	5	恭敬舎	山城 1	京都	東山区	天明 4	嘉永存続	
81	146	健順舎	山城 2	京都	中京区	文化 7・8、弘化 2・3	文政、安政 6 没	
82	1	五樂舎	山城 3	京都	中京区	明和 2	天保殺庵逝去	○・碑
83	3	時習舎	山城 4	京都	上京区	安永 8	三舎印、明治	
84	4	修正舎	山城 5	京都	下京区	安永 2、文化 9、天保 4	三舎印、現在	◎・碑・書
85	2	明倫舎	山城 6	京都	中京区	天明 2	三舎印、現在	◎・扁・書
86	42	養性舎	山城 7	京都	下京区	寛政 5	嘉永存続	
87	86	觀行舎	山城 8	京都	東山区	文化 5、6	嘉永存続	
88	41	弘道舎	山城 9	京都	伏見区	寛政 5	文化	
89	155	由行舎	山城10	京都	東山区	嘉永 4	安政没	
90	129	樂行舎	山城11	京都	上京区	文政13	明治 6 明倫舎と合併	○・碑
91	129	求心舎	丹後 1	京都	舞鶴市	文化初年	安政存続	
92	83	立敬舎	丹後 2	京都	舞鶴市	文化10	安政存続	
93	108	三樂舎	丹波 1	京都	福知山市	文化11、12	天保	○・碑
94	7	持養舎	丹波 2	京都	亀岡市	天明 6、7	文政	○・碑
95	153	習教舎	和泉 1	大阪	貝塚市	嘉永	不明	
96	71	正心舎	和泉 2	大阪	阪南市	寛政 9	文化	
97	152	善誘舎	和泉 3	大阪	岸和田市	嘉永	不明	
98	114	庸行舎	和泉 4	大阪	堺市	文化14~文政初	万延以降存続	座像
99	145	有慶舎	河内 1	大阪	河内長野市	弘化 2	不明	
100	11	倚衡舎	摂津 1	大阪	西区川口	天明 3、弘化 3 移転	天保末、安政存続	
101	26	恭寛舎	摂津 2	大阪	北区	天明 7	弘化に活動実績	
102	95	協恭舎	摂津 3	大阪	中央区	文化 7、8 頃	明治	
103	149	信成舎	摂津 4	大阪	中央区平野町	弘化 4	明治	
104	10	靜安舎	摂津 5	大阪	西区立売堀	天明 1・2	明治	○・墓
105	31	敦厚舎	摂津 6	大阪	天王寺区	寛政元	明治	
106	19	明誠舎	摂津 7	大阪	中央区	天明 5	現在	◎・碑・書
108	101	立教舎	摂津 8	大阪	池田市	文化10、弘化 4	天保、嘉永	○・扁・書
107	80	恭心舎	摂津 9	兵庫	伊丹市	享和 1、2	文政	
109	23	愼明舎	摂津10	兵庫	神戸市兵庫区	天明末年	幕末活況	
110	12	敏行舎	摂津11	兵庫	神戸市中央区	天明 3、4 頃、弘化	文化	
111	17	明善舎	摂津12	兵庫	神戸市北区	天明 4、5 頃	文化	
112	25	養心舎	摂津13	兵庫	尼崎市	天明末年	文化	
113	38	樂友舎	摂津14	兵庫	西宮市	寛政 4、5	天保	
114	65	廣胖舎	丹波 3	兵庫	丹波市	寛政 9、10頃	天保 5	○
115	6	傳習舎	丹波 4	兵庫	〃	天明 3・4	文化 7	○・書
116	62	中立舎	丹波 5	兵庫	篠山市	寛政 9	明治 6	◎・建・扁・書

117	無	大洋舎	淡路1	兵庫	淡路市	文化・文政	弘化	
118	66	含章舎	但馬1	兵庫	豊岡市	寛政8~10頃、天保	文化、安政存続	
119	30	敬忠舎	但馬2	兵庫	養父市	天明7・8	文政2没	○・碑
120	36	日新舎	但馬3	兵庫	豊岡市	寛政3頃	文政	
121	84	養浩舎	但馬4	兵庫	豊岡市	文化元頃	天保	◎建・号・書
122	138	立誠舎	但馬5	兵庫	養父市	天保14	不明	○建・扁
123	24	以善舎	播磨1	兵庫	明石市	天明6・7	文政	
124	91	永孝舎	播磨2	兵庫	小野市	文化6	天保6	
125	160	温故舎	播磨3	兵庫	宍粟市	文政10頃	弘化	
126	132	教孝舎	播磨4	兵庫	加西市①	天保3・4	不明	
127	109	立行舎	播磨5	兵庫	加西市②	文化12・13	天保	
128	82	好古舎	播磨6	兵庫	加古川市①	文化元	天保	
129	85	素行舎	播磨7	兵庫	加古川市②	文化1・2	天保	
130	144	孝徳舎	播磨8	兵庫	姫路市①	天保末、弘化移転	不明、近年まで建物	◎・書
131	18	明篤舎	播磨9	兵庫	姫路市②	天明4・5	明治初	
132	143	思誠舎	播磨10	兵庫	たつの市	天保末	明治6・7、近年まで建物	○・扁
133	125	修道舎	播磨11	兵庫	佐用町	文政10頃	弘化	
134	37	典學舎	播磨12	兵庫	三木市①	寛政5・6	弘化	
135	113	徳本舎	播磨13	兵庫	三木市②	文化14	天保	
136	135	入徳舎	播磨14	兵庫	加東市	天保6・7	安政存続	
137	163	求仁舎	大和1	奈良	御所市	安政7	慶応	
138	164	友直舎	大和2	奈良	〃	安政7	慶応	
139	27	思明舎	大和3	奈良	天理市	天明末、安政6	文化、慶応	
140	54	本立舎	大和4	奈良	〃	寛政5、6頃、安政	文化、慶応	
141	16	正誠舎	大和5	奈良	橿原市	天明4・5	文化、幕末存続	
142	14	篤敬舎	大和6	奈良	宇陀市	天明3~5	文化	○
143	166	明徳舎	大和7	奈良	大和郡山市	万延2	慶応	
144	72	亦樂舎	紀伊1	和歌山	橋本市	寛政11・12年	天保	
145	88	三樂舎	紀伊2	和歌山	紀の川市	天明4年頃(中断)	天保	
146	13	修敬舎	紀伊3	和歌山	和歌山市	天明3-5	大正末年	
147	159	篤信舎	紀伊4	和歌山	和歌山市	安政4・5年	慶応存続	
148	158	有信舎	紀伊5	和歌山	湯浅町	安政4・5年	不明	○・墓
149	90	樂善舎	紀伊6	和歌山	海南市	文化6・7年	天保	
150	無	双松舎	紀伊7	和歌山	橋本市	天明より	天保存続、舎公開中	◎建・書
151	100	興孝舎	備前1	岡山	備前市	文化8、9	天保	
152	75	三行舎	備前2	岡山	岡山市	寛政11	嘉永(活動)	
153	98	博習舎	備前3	岡山	瀬戸内市	文化8、9	天保	◎・碑
154	106	教睦舎	備中1	岡山	倉敷市	文化10、11	天保	
155	99	敬明舎	備中2	岡山	倉敷市	文化8、9、平成	天保、活動中	◎
156	136	自省舎	備中3	岡山	倉敷市	天保5・6	不明	○
157	97	由學舎	備中4	岡山	倉敷市	文化8、9	天保	
158	105	克明舎	美作1	岡山	勝央町	文化10、11	天保	
159	35	荘敬舎	美作2	岡山	津山市	寛政3、4	文化	
160	40	直養舎	美作3	岡山	美作市	寛政4、5	文化初期	
161	150	成教舎	因幡	鳥取	鳥取市	嘉永元	明治活動	◎・扁・書
162	140	主静舎	伯耆	鳥取	米子市	天保12、13	嘉永没	
163	107	歡心舎	安芸1	広島	広島市	文化10~12	明治も繁栄	○・墓
164	115	敬信舎	安芸2	広島	広島市	文政2	明治以降存続	
165	142	修安舎	備後1	広島	尾道市	天保14	元治に活動(舎不明)	
166	128	琢玉舎	備後2	広島	尾道市	文政10頃	同上	
167	167	忠順舎	備後3	広島	福山市	安政~文久3	不明	
168	168	庸徳舎	備後4	広島	福山市	安政~文久4	不明	
169	127	厲行舎	備後5	広島	三原市	文政10頃	天保に実績	

170	102	盡性舎	石見	島根	浜田市	文化10	天保	
171	無	安民舎	出雲	島根	安来市	安政末～文久	幕末までは続く	
172	126	齋省舎	長門1	山口	下関市	文政10	嘉永	
173	124	日章舎	長門2	山口	萩市	文政10頃	弘化3	
174	46	根心舎	阿波1	徳島	つるぎ町	文化5・6頃	弘化	◎・碑・墓
175	87	學半舎	阿波2	徳島	鳴門市	寛政5・6	文政末	
176	53	性善舎	阿波3	徳島	徳島市	寛政5・6	明治活動	
177	147	新民舎	伊予1	愛媛	今治市	弘化2・3	文久活動	○・碑
178	110	六行舎	伊予2	愛媛	松山市	文化11, 12	明治元年講師没	
179	78	循性舎	土佐1	高知	高知市	寛政12頃	文政	
180	123	安民舎	筑後1	福岡	柳川市	文政10	弘化存続	
181	無	一貫舎	豊後1	大分	大分市	寛政3・4	慶応存続	
182	157	廣徳舎	豊後2	大分	竹田市	安政3、明治13	明治活動	

【注】

- ①連続No.、②『諸国舎号』の記載順(1～170)、③舎名、④国名、⑤現在の都道府県名、⑥現在の市町村名
 ⑦創始年、⑧廃絶年、⑨備考:心学風土記◎、訪問○、その他記号は本文参照

3. 心学講舎は幾つあったか

「全国心学舎一覧表」を作成する過程で、私が数えた心学舎数は182舎となった。どれを舎として取捨選択するか迷う部分もあった。今なお追加あるいは減少すべきかどうか、微妙な舎もある。先人の研究功績も参考にし、一旦はこの表で留めおくものとする。

なお、講舎登録の申請をしながら叶わなかった所、講舎申請を行わずに心学の学び舎を継続したところが、正規登録の何倍もあったであろうことは想像できる。

私の掲載規準は以下の通り。①『諸国舎号』に掲載の170舎は全て含める。②石川(1938)の索引を尊重。③その他は個別判断。

心学舎に関する先行研究の、白石正邦(1920)⁽²⁰⁾、石川謙(1982)、清水の三者の掲げる舎名を【表7】「心学舎比較表」に記載した。白石は172舎、石川は181舎、清水は182舎。

【表7】心学舎比較表(「舎」は略す)

	白石正彦172舎	石川謙181舎	清水正博182舎
諸国舎号以外の掲載舎	開成(江戸)、自謙(江戸)、富円(美濃)、執中(美濃)、眞明(駿河)、三省(駿河)、有隣(摂津)、敬直(備後)、	開成(江戸)、自謙(江戸)、仁儉(越中)、眞明(駿河)、敬讓(遠江)、三省(遠江)、富円(美濃)、執中(美濃)、会友(美濃)、有隣(摂津)、安民(出雲)、一貫(豊後)	誠終(蝦夷)、開成(江戸)、自謙(江戸)、仁儉(越中)、敬讓(遠江)、富円(美濃)、執中(美濃)、会友(美濃)、大洋(淡路)、双松(紀伊)、安民(出雲)、一貫(豊後)
諸国舎号170舎中掲載舎	164	169	170
未掲載	自謙(上野)、擇仁(遠江)、謹身(美濃)、歆心(安芸)、齊省(長門)、新民(伊予)	謹身(美濃)	

「諸国舎号」中、白石は164舎、石川は169舎、清水は170舎を含めた。「諸国舎号」以外の掲載は、白石8舎、石川12舎、清水12舎である。うち3者が共通4舎、清水と石川5舎。白石と石川3舎、石川のみ1舎。清水のみは3舎。その3舎、誠終（蝦夷）は市に扁額・蔵書など残る。大洋（淡路）は石川（1932）が6頁に亘り活動内容を記載。双松（紀伊）は現在も舎が残り遺品を公開中。なお清水のみが掲載しなかった三省（遠江）、眞明（駿河）、有隣（摂津）の3舎は詳しい情報が不足のため、今後、把握できれば加えていきたい。

Ⅳ 心学風土記

「心学風土記」（サブタイトル～石田梅岩の教えを受け継ぐ講舎を訪ねて～）は、現地調査を行った舎について、順次『環境社会新聞』（本社・亀岡市）に毎月掲載し、2019年2月末現在、25回に亘る。掲載舎は以下の通りである。（ ）内は国名。

誠終舎（蝦夷）、鶴鳴舎（出羽）、尽心舎・有隣舎（常陸）、恭儉舎・参前舎（武蔵）、有敬舎・時中舎（信濃）、反求舎（加賀）、順天舎（尾張）、切問舎・深造舎（美濃）、麗澤舎・有誠舎（伊賀）、好善舎（近江）、明倫舎・修正舎（山城）、明誠舎（摂津）、孝徳舎（播磨）、中立舎（丹波）、養浩舎（但馬）、実行舎（大和）、双松舎（紀伊）、博習舎（備前）、敬明舎（備中）、成教舎（因幡）、根心舎（阿波）。

その中から、誠終舎（蝦夷）、尽心舎・有隣舎（常陸）、有敬舎（信濃）、明誠舎（摂津）を紹介する。

1. 誠終舎（蝦夷）：函館に西川晩翠の指導のもと心学が開花

函館における心学指導者は、江戸住まいの西川晩翠（元鳥取藩士）。西川を招いたのは名主頭取の松代伊兵衛が渋田利右衛門らと図った。西川はこの地で終焉を迎え、函館港を見下ろす高台の称名寺の松代家の墓地に、伊兵衛と隣り合って眠っている。

函館市立中央図書館には、誠終舎関係の資料が多数残されており、同館学芸員の助けでそれらを具に拝見できた。

函館の地に、心学が根付いたいきさつは、嘉永4（1851）年5月、西川が函館に招かれ、社中を集め松栄講を創らせた。そこで毎月1・6の日に心学道話を講じた。社会教化に努めること数年。ついに期が熟し、安政4（1857）年5月に、道場を大町沖の口前に新築。函館奉行、堀織部正利熙が舎号を撰して、誠終舎と書き与えた。

西川は舎の開講を待てず同年の4月9日、「かりの世にかりの命に仮の身を入用次第返済をする」の辞世を残し逝去。

舎の運営責任者は松代・渋田。西川の没後、講師は代島剛平が務めた。代島は、松前藩士で、森重流砲術・柔剣道の達人。心学を晩翠に学ぶ。安政元年四月米使ペリー、九月露使プチャー

チンの応接掛を担当。同2年函館奉行支配定役に就く。明治元年、政変に感ずるところあり亀田村に移り帰農。同2年函館に帰り学校を開き子弟を教育し、夜間心学道話を講じ、明正会と称した。明治7年没。

洪田は勝海舟も彼の学識・識見・蔵書家であることに敬意を表す。安政5年12月に没する。

松代は、嘉永以来、農業にも心を尽くし大野村の開墾に着手。明治14年田畑30余町歩の成墾を見る。コレラの防疫に挺身努力の結果これに感染し、明治19年病死。

心学関係者はいずれも時処位を得た実践者であった。中央図書館に所蔵の心学関連資料の内訳は以下の通り。①誠終舎扁額、②西川晩翠関連21種、③松代伊兵衛関連6種、④代島剛平関連4種、⑤洪田利右衛門関連他9種、⑥一般書11冊、⑦その他、開架に心学関連書多数。

2. 尽心舎（常陸）：平成まで集いを続ける

尽心舎は、寛政6（1794）年に土浦藩小田村に設立。都講は小泉新右衛門。この舎は平成の世まで続いた。関係者子孫、8軒が1994年まで毎年3月に集まり、二百年に亘り心学の先師に感謝する集いを開催していた。床の間に師（石田梅岩、中澤道二、手嶋和庵）の肖像画や書をかけ、師専用の食器を出し、食事を提供し続けていた。舎の中心人物である小泉家には「尽心舎」碑が残されている。紀元2600年（1940年）を記念して、小泉眷氏により建碑された。

舎の祭祀が途絶えた後、子孫から市へ寄贈の遺品、木箱10箱、ダンボール1箱が出土文化財管理センターに所蔵されている。中味は舎号扁額、石田梅巖真跡石刻、手嶋堵庵の肖像・真蹟石刻、中澤道二肖像、手嶋和庵真蹟、靈膳（梅巖、道二、和庵）、『手嶋先生事蹟・上河先生事蹟』など古文書多数。

同センターでは、齋藤茂氏（『石門心学活動の経済背景～常陸国小田尽心舎の場合』の著者）より、尽心舎関連の遺品に関して説明頂いた。これだけの心学関連の財産が質量ともに保存されている例は貴重なものだ。年1回とはいえ、三師と共に、宴席に連なることができるとは、門弟の最高の喜びである。

平成の世まで舎の集いを続けたこと、及び小泉家に建立された碑に敬意を表す。舎の復活の日が再び出現することを願いたい。

3. 有隣舎（常陸）：子孫は二十代目中村兵左衛門氏

筑西市にある中村美術サロンを訪れ、当主・兵左衛門氏に有隣舎の歴史を伺った。中村家二十代の経営史に興味尽きない。

同家に残る『心学こゝろのしらべ』は心学による商家の師弟教育の事例を伝えている。長谷川伸（2006）『文政期下館町における石門心学の青少年教化の実際』⁽²¹⁾より引用する。文政10年（1827）のある会輔では、商家の女子ばかり15歳5人、14歳1人、11歳3人、9歳1人に「道を行くに人とつきあたらぬように行くは如何致して行く候哉」という策問。会輔では参加者各々

が回答を持ち寄り発表し、最後に講師が自身の解釈を披露する。11歳の女子は「朝起きてあの人は悪い、この人は悪いというを人の道につきあたると存じ候。心正直なればつきあたる事は御座なく候」と答えている。女子も商家に嫁げば後継者育成に勤まなければならない。心学教育の水準の高さが伺える資料だ。

4. 有敬舎（信濃）：平成の世に心学「有敬舎」の建碑

中村習輔は信州心学の祖と言われ、埴科郡（現千曲市）に恭安舎を設立し、国内外に多くの門人を有した。岩岡村庄屋の岩岡英信^{てるのぶ}は習輔の門人となり、寛政9（1797）年頃、有敬舎を設立する。平成9（1997）年、舎設立200年を記念して、安曇郡梓川村（現松本市）の岩岡弘明家に建碑された。当時の写真を見ると一族70名程が集まって祝ったことがわかる。

碑の表面には「有敬舎」と「伴次郎街道」とある。岩岡家の英信（有敬舎創設時舎主）、英棟^{たか}、英総^{てるとし}の三代にわたり、私財を投じて松本から飛騨高山に通じる通称「伴次郎街道」（飛騨街道）を開鑿^{かいさく}したことで知られる。

この度、岩岡弘明氏を訪ね、これまでの舎のいきさつを聞いた。岩岡家の心学関係の資料は、火災による消失などもあり、有敬舎の扁額と庭石が残るのみとのこと。

弘明氏は私家版の『飛騨新道と有敬舎～岩岡家三代の足跡～』を発刊されておられる。

この中に「有敬舎の御条目」が掲載されている。標題に「御高札のうつし大略～善人^{よきひと}になる教え～」とある。最初のお四か条を要約すると、①人皆親しく奉公に精出し、②家業を専らにし分限過ぎず、③人の害となることをせず、④博打の類は禁制とする。そして「此の教えの御しめしの御恩にて、毎日三度の御めしをいただき着物もでき、此の教えの通り背かず勤めさえずりゃ何不足なく諸道具もできる。この外に人の道はない」と断ずる。

そして心学道歌「神佛聖と御名は変われども教えは同じ人の道すじ」で締めくくられている。後々まで村人に語り聞かせていたようだ。現代の人々にこそ、実践してほしい内容だ。

この三代の大業、心学精神と新街道の建設を後世に伝えようと平成の世になって記念碑を設立された岩岡家の方々に敬意を表し、私も及ばずながら、その伝承に幾分なりともお役に立てれば幸いである。

5. 明誠舎（摂津）：大丸は義商なり、今日まで心学会の中核を担う

1837（天保8年）、大塩平八郎の乱に際し、利を優先させていた富豪や大商人はことごとく焼き討ちにあったのに対し、「大丸は義商なり、犯すなかれ」と心齋橋大丸は焼き討ちを免れた。

明誠舎主催の街歩きの前に、舎のあった場所を特定するため資料を探索し、創始者・井上宗甫の名前のある古地図を発見した。現在の大丸北館東側の心齋橋筋に面した場所である。

大丸の社は「先義後利」であり、新入社員教育に際しては石門心学が教えられていた。発祥の地の京都では、四条店の開業は梅岩先生が講義を始めた同年である。店の直近に梅岩先生

の講舎があり、講義創始の塗師屋町には大丸の広い所有地もあるなど深い縁で結ばれている。

心学明誠舎は1785（天明5）年に三木屋太兵衛（井上宗甫）が、梅岩先生の高弟・手島堵庵の指導を受け、心斎橋筋^{かざりやまち}屋町に創設した。『諸国舎号』170舎中、22番目に記載されている。創設の地が手狭になり、1792年に博労町に移設し80年間、船場において商人のための心学舎として中核をなし、中澤道二^{どうに}、上河淇水^{うえかわきすい}なども度々来講するほか、明誠舎講師も各地へ巡講した。また各舎への講師斡旋も行った。

江戸時代、大坂には七舎あり、共に協調して先師の祭祀を行ったほか、市中の商家の家訓の制定・遵守、子弟・店員教育などに力を注ぎ、大坂商人が後代においても営々と栄える基盤をなした。

明治になり新学制に伴い舎の地は金田小学校に提供した。1881年に長堀橋筋に新学舎を建てる。他舎の活動が休止していく中、岡本孝道・山田俊卿らの奔走で舎の活動は活発に継続し、1905年には他舎に先駆け社団法人の認可を得た。現在、この地には大阪市により「心学明誠舎跡」碑が建立されている。その後、移転した竹屋町の舎屋は大戦の空襲で焼失したが、全国の心学信奉者の後押しもあり、戦後、活動を再開し竹中靖一を中心に例会が継続され今日に至っている。

現在は一般社団法人として、年間12回程の講座開催のほか、ホームページ・フェイスブックなどで情報発信し、京都の心学修正舎、亀岡市の石田梅岩先生顕彰会、倉敷市の心学敬明舎とともに、心学広布に努めている。

V 経済人への影響

1. 松下幸之助と石田梅岩の共通点

松下幸之助（1894～1989）は1905（明治38）年、船場にある堺筋淡路町の五代自転車店に丁稚奉公に入った。松下がこの時分に働いた船場・島之内には心学明誠舎などがあり、大阪商人には石門心学の教えが根付いていた。その頃に松下が心学に触れた可能性がある。

松下電器産業で財務担当として松下に仕えた平田雅彦元副社長が自著⁽²²⁾で次のように語っている。

松下は1918年（24歳）で松下電気器具製作所を創業。売上を伸ばし利益をあげるに精一杯であった創業当初から、しばらくして心の満足が得られていないことに気付く。10年程経ち、ようやく心の整理ができ、次の綱領を発表する。「営利と社会正義の調和に念慮し、国家産業の発展を図り、社会生活の改善と向上を期す」。

その後、営利と社会正義の調和について、明確な論理構築ができずにいたが、苦慮の上、ようやく得られた経営哲学は「利益は企業が世の中に貢献した報酬である」。

平田は、松下経営哲学の源泉を探っていくうちに、石田梅岩・石門心学に出会ったという。

梅岩は「人の人たる道」の探究から出発し、自分の人生観と仕事の価値観の一致を限りなく追究した。自己に厳しい倫理観と社会的責任感の土台とし、世界の民の平和と心の安定を目指す。これこそCSRの原型であると平田は感得した。そして「綱領」「松下経営哲学」と石田梅岩『都鄙問答』との一致に平田は驚愕したという。「松下電器の基本理念と全く同じことが、梅岩の商人道で述べられている」と。

2. 稲盛和夫と石田梅岩

稲盛和夫（1932～）の著書『京セラフィロソフィ』（²³）の冒頭に「心を高める」がある。

「私は企業経営をしていくにあたり、“心”というものが一番大事だと考えてきました」と語る。理系出身で技術者の稲盛が、「心」を高めることこそが「人生の意義」であり、「人生の目的とは、心の純化、浄化に努め、心を立派にしていくこと」と言い切っている。

程度までしている稲盛は、『仏教聖典』の影響を受けたとも述べている。その一部を紹介しよう。「この世界は心に導かれ心に引きずられ心の支配を受けている／迷いの心によって 悩みに満ちた世間が現れる／すべてのものはみな心を先とし心を^{あるじ}と主とし心から成っている」。

2000年10月に京都で「心学開講270年記念シンポジウム」が開催された。以下はそこでの稲盛の講演記録の要旨である。

稲盛はが京セラを創始したとき、「企業を経営するとはどういうことか」と真剣に悩み、その大義を求めていた時期があった。

ちょうどその頃、石田梅岩の心学に触れる機会に恵まれ、「武士が禄を^は食むのと、商人が利を得るのは同じである」という考え方に接し、大変勇気づけられたと語っている。世のため人のために商売をしているのであり、正しい商いで正々堂々と儲ければいい。それを江戸時代のあの封建社会の中で言ってくれた人がいたということに、わが意を得たりと思ったのであった。

「心」を追い求めてきた稲盛にとって、「心を知る」を生涯のテーマに掲げた梅岩と出逢うべくして出逢ったのである。

平田（2005）は「梅岩から松下幸之助、稲盛和夫に受け継がれた思想」（²⁴）について、稲盛の言葉「森羅万象すべてのものを進化発展させていく宇宙の流れと同調するかないか、人生や仕事の成否が決するのではないか」、松下の言葉「経営者たる人はみずからの人生観、社会観、世界観というものを常日頃から涵養していくことがきわめて大切だといえる。（中略）社会の理法、自然の摂理にかなったものでなくてはならない」を紹介している。

これは梅岩が「理をきわめ天道聖人の心通用するを以て宝とする。（中略）理を知るを学問の本と決定すべし。理明らかなれば万事時の宜しきに^{かな}合うべし」（²⁵）と語っていることと同義である。三者の経営哲学の真髄⁽²⁶⁾がここにおいて一体となっている。

3. 企業経営に生きる心学の教え～半兵衛麩・商業界・叶匠寿庵～

「半兵衛麩」(京都市)は1689年創業の京麩の老舗で、現在の会長玉置半兵衛(辰次)は十一代目になる。三代目三十郎は梅岩の弟子の杉浦止斎に学び、その教えを代々守り続けた。「先義後利(せんぎこうり=正しい人の道を先にして利益は後にする)」を家訓とし、梅岩の教えの通り「正直に商売すれば栄える」を貫く。原料を精選し高品質な商品を、丁寧な接客で販売することにより固定客を増やしている。梅岩の伝える商売の王道はいつの時代でも変わらない。玉置は父から聞いた人の生き方を『あんなあ よおうききや』⁽²⁷⁾に綴っている。梅岩の教えが心学発祥の膝元で現代経営に活かされている。

小売業の指導団体「商業界」は教育活動や啓蒙的書物の出版活動を行っている。創設者の倉本長治の理念「店はお客のためにある」を基本に、「正しく生きる商人」を支援すべく、「商業界ゼミナール」などを開催している。その原点に生きるのが、石田梅岩が説いた「商人に商人の道あることを教ゆるなり」である。なお倉本の著書に『石田梅岩ノート』⁽²⁸⁾がある。後継者の倉本初夫も父の遺訓を受け継ぎ、「心学精神」をもって商業の健全な成長に貢献した。

「叶匠寿庵」は1958年に天津市で創業した和菓子店である。創業者、芝田清次の父は京都・祇園の近くで大きな薪炭問屋を営む「石門心学」の信奉者で、家には心学関係の書物が数多くあったという。清次は語る。「私には梅岩の考え方に納得し、共感共鳴することが少なくないのである。父ほどの石門心学の信奉者ではありえないが、私は父が遺してくれたものを通して石門心学の一端に触れて来られたことを幸せに思わざるをえない」⁽²⁹⁾。

一例を挙げたがこのように心学の教えは経営に脈々と引き継がれている。梅岩の語る「^{まこと}実^に子孫を愛せば、道を学びて栄えることを致すべし」(前述)を先人は受け継いできたのである。

VI おわりに

以上、「石田梅岩の真髓と、現代に伝承される石門心学」について綴ってきた。

梅岩の独自性・新規性は江戸中期にありながら商人道(現代で言うとCSR)と知心の両輪を説いてきたことである。梅岩が知心を何故強調したかは、それが目的に到達しやすく且つ行いが堅固なものとなることを、体験として知っていたからである。それが本稿で長い頁を割いて述べた了雲との師弟関係～いわば闘い～であった。この間の修養から大悟に至る過程は「これ文字のする所にあらず。修行のするところ」(前述)と常々語っている通り、彼のバックボーンとして、時の権威ある学者に対しても臆することなく、堂々の論陣を張れたのである。

また梅岩の功績は女性の能力を評価して世に出す先駆者であったことだ。門弟から慈音尼、心学舎中から浅井きを、矢口仲子ら多くの指導者を生み、門人名簿にも多数の女性名が記載されている。当時の実践教化機関としておよそ考えられない女性比率の多さであった。また石門心学が商家の子弟教育にも一貫して取り組んだことは先師の遺産である。

梅岩後の石門心学史については記載の通り、石川謙（1938）『石門心学史の研究』に限りない恩恵を受けてきた。一方で同書は出版から81年が経っている。今一度、石川の偉業に戻り、同じ地平に立って再検証する必要があると感じ、主だった地を訪問し「全国石門心学講舎一覧表」を作成した。本表の活用は今後の課題である。

各地における心学舎の遺産はまだまだ多く埋もれている。郷土史家の方々とともに連携し光を当てていきたい。実際に現地を訪問してみると、貴重な遺物の散逸・行方不明にも遭遇する。所有者の高齢化と共に、その恐れは増していく。今後は、石門心学連絡協議会（仮称）のような機関を設け、受け皿となる大学など公的機関に収蔵庫を有し、研究や広布活動を促進する体制が望まれる。

冒頭に記載の通り「企業不祥事が今なお後を絶たない」昨今、国内のみならず海外の関心も高まっている。開講290年に当たる今年、修正舎、明誠舎、明倫舎、石田梅岩先生顕彰会らが主催する記念講演会が予定されている。また開講の地には記念碑が2本建立される。

これを機に、各地での学校教育や社会教育、企業経営における永続的繁栄を目指す活動に、石田梅岩・石門心学の教えが活用されることを念じている。私も及ばずながら更なる発信を行う所存だ。ホームページ<https://www.yamatoshingaku.com/>（心学・大和で検索）にて随時情報公開すると共に、心学に関心を持つ方々と交流していきたい。

参考文献

- (1) 心学明誠舎は、天明5年（1785）、大阪に創設の石門心学講舎の一つ。現在も一般社団法人として活動を続けている。
- (2) 清水正博「特集解題」『季刊イズミヤ総研』Vol.87（2011年7月）
- (3) 石田梅岩の著書は『都鄙問答』『齊家論』。弟子による出版物は『石田先生事蹟』『石田先生語録』。柴田實編（1956）『石田梅岩全集（上巻）（下巻）』（成文堂）にこの四書は含まれる。以後、特に注記しない限り、梅岩の言葉は同書からの引用による。但し、一部を除き、現代語仮名遣いに改めた。
- (4) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生事蹟』下巻621頁、
- (5) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生事蹟』下巻622頁
- (6) 柴田實編（1956）前掲書、『都鄙問答の段』『都鄙問答』上巻8頁
- (7) 柴田實（1977）『梅岩とその門流』ミネルヴァ書房79頁
- (8) 岩内誠一（1934）『教育者としての石田梅岩』立命館出版部79頁
- (9) 梅岩自筆のこの書は心学明誠舎所蔵
- (10) 柴田實編（1956）前掲書、『齊家論』上巻211頁
- (11) 「荻生徂徠・政談」（1974）『日本の名著16』中央公論社、454～455頁
- (12) 柴田實編（1956）前掲書、『或る学者商人の学問を議の段』『都鄙問答』上巻82頁
- (13) 『都鄙問答』に関する出版物は、柴田（1956）以外に、足立栗園校訂、岩波文庫（1935）、加藤周一訳「石田梅岩・富永仲基」『日本の名著14』中央公論社（1971）、城島明彦訳『石田梅岩・都鄙問答』致知出版社（2016）などがある。
- (14) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生事蹟』下巻622～624頁
- (15) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生語録補遺』（368）下巻432頁
- (16) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生語録』（106）下巻86～87頁
- (17) 柴田實編（1956）前掲書、『石田先生語録』（131）下巻151頁
- (18) 石川謙（1938）『石門心学史の研究』岩波書店、石川謙（1982）『増補心学教化の本質並発展』合同出版。心学舎に関する情報の多くは石川（1938）より得ている。
- (19) 『諸国舎号』は明誠舎所蔵を用い、順序の差異の有無を明倫舎蔵と照合した。

石田梅岩の真髓と現代に伝承される石門心学

- (20) 白石正邦 (1920) 『石門心学の研究』 成美堂書店
- (21) 長谷川伸 (2006) 「文政期下館町における石門心学の青少年教化の実際～中村兵左衛門家文書（心学ころのしらべ）の紹介～」『石門心学史の思想』 ぺりかん社
- (22) 平田雅彦 (2005) 『企業倫理とは何か～石田梅岩に学ぶCSRの精神～』 PHP新書
- (23) 稲盛和夫 (2014) 『京セラフィロソフィ』 サンマーク出版
- (24) 平田雅彦 (2005) 前掲書、62頁、66頁
- (25) 柴田實編 (1956) 前掲書、「或る学者商人の学問を議るの段」『都鄙問答』 上巻73頁
- (26) 詳細は、清水正博「天地自然の理と一体化した実業家～稲盛和夫、松下幸之助と石田梅岩」『季刊イズミヤ総研』 Vol.109 (2017年1月) を参照されたい。
- (27) 玉置半兵衛 (2003) 『あんなあ よおうききや』 京都新聞出版センター
- (28) 倉本長治 (1978) 『石田梅岩ノート』 商業界
- (29) 芝田清次 (1985) 『花雲水』 講談社